



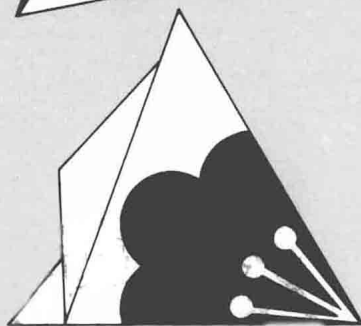
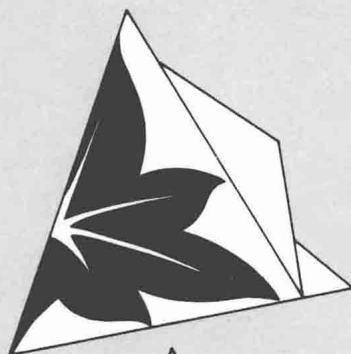
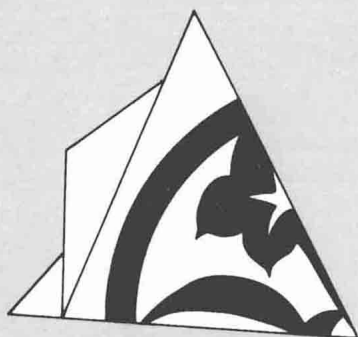
花小説・戯曲選



第八卷



岩波書店



鏡花小説・戯曲選 第八卷

第六回配本(全十二巻)

一九八一年一月二十五日 第一刷発行

定価 三五〇〇円

著 者 いづみ 泉 鏡 太 郎

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目 株式会社 岩波書店

電話 〇三六五四二二
振替 東京六六三三四〇

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

金時計	一
貧民俱樂部	一七
X蠶螂鯨鐵道	二九
なゝもと櫻	一五
辰巳巷談	二九五
通夜物語	四〇一
解 說	五三
村松定孝	五三

金 時 計

上

廣告

一 拙者昨夕散步の際此邊一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候間御拾取

の上御届け下され候御方へは御禮として金百圓呈上可仕候

月 日

あーさー、へいげん

是相州西鎌倉長谷村の片邊に壯麗なる西洋館の門前に、今朝より建てる廣告標なり。時は三伏盛夏の候、聚り讀む者堵の如し。

へいげんといふは東京……學校の御雇講師にて、富豪を以て聞ゆる——西洋人なるが、毎年此別荘に暑を避くるを常とせり。

館内には横濱風を粧ふ日本の美婦人あり。蓋し神州の臣民にして情を醜虜に繋ぐもの、俗に洋妾と稱ふるは是なり。道を行くに愧る色無く、人に遭へば、傲然として意氣頗る昂る。昨夕へいげんと兩々手を携へて門前を逍遙し、家に歸りて後、始めて祕藏せし瑞西製の金時計を遺失せし

を識りぬ。警察に訴へて搜索を請はむか、可は即ち可なり。然れども懸賞して細民を賑はすに如かずと、一片の慈悲心に因りて事爰に及べるなり、と飯炊に雇はれたる束髪のお婦人、人に向ひて喋々其顛末を説けり。

渠は曰く、「だから西洋人は難有いよ。」

懸賞金百圓の沙汰即日四方に喧傳して、土地の男女老若を問はず、我先に此財を獲むと競ひ起ち、手にく鎌を取りて、へいげん門外の雑草を刈り始めぬ。

洵や金一百圓、一錢銅貨一萬枚は、是等の細民が三四年間粒々辛苦の所得なるを、萬一咄嗟に箇の大金を獲ば、蓋し異數の僥倖にして、坐して半生を暮し得べし。誰か手を懐にして傍觀せむや。

翌日は頃に十人を加へ、其翌日、又其翌日、次第に人を増して、遂に百を以て數ふるに到れり。渠等が炎熱を冒して、流汗面に被り、氣息奄々として勞役せる頃、高樓の窓半ば開きて、へいげん帷を掲げて白晳の面を露し、微笑を含みて見物せり。

斯くて日を重ねて、一町四方の雑草は悉く刈り盡し、赤土露出すれども、金時計は影もあらず。草刈等は仍倦まず、怠らず、撓まず、此處彼處と索れども、金屬は釘の折、鐵葉の片もあらずりき。

一家を挙げ、親族を盡し、腰辨當を提げて、早朝より晩夜まで、幾日間炎天に腦汁を煮られて、徒汗を掻きたる輩は、血眼になりぬ。失望して殆ど狂せむとせり。

されど毫も疑はざりき。渠等はへいげん君の富且つ貴きを信すればなり。

渠等が勞役の最後の日、天油然と驟雨を下して、萬石の汗血を洗ひ去りぬ。蒸し暑き雜草地を拂ひて雨漸く晴れたり。土は一種の掬すべき香を吐きて、綠葉の雫滴々、海風日没を吹きて涼氣秋の如し。

へいげん此夕又愛妾を携へて門前に出でぬ。出でて快氣に新開地を歩み行けば、松の木蔭に雨宿りして、唯濡れに濡れたる一個の貧翁あり。

多くの草刈夥間は驟雨に狼狽して、蟻の如く走り去りしに、渠一人老體の疲勞劇しく、足踰躑ひて避け得ざりしなり。龍動の月と日本のあだ花と、相並びて我面前に來れるを見て、老夫は慌しく跪き、

「御時計は、はあ、何處にもござりましねえ。」

幾多の艱難の無功に屬したるを追想して、老夫は漫に涙ぐみぬ。

美人は流眄にかけて、

「眞個に御苦勞だつたねえ。」と冷かに笑ふ。

「へいげんは哄然大笑して、

日本人の馬鹿！」

と謂ひ棄てつ、徐に歩を移して濱邊に到れば、一碧千里烟帆山に映じて縹渺畫の如し。

へいげん美人の肩を拊ちて、

「人間は馬鹿な國だが、景色の好いのは不思議さ。」

と英語を以て囁きたり。

洋妾はへいげんの腕に縋りつゝ、

「旦那もう歸らうぢやございせんか。薄暗くなりましたから。」

「うむ、徐々歸らうか。あの門外の鬱陶しい草には弱つたが、今ではさつぱりして好い心持だ。」

「ですけれども、あの人足輩は何んな氣持でせうね。」

「矢張時計が見着からないのだと想つて、落膽してゐるだらうさ。」

「貴下は眞個に智慧者で在らつしやるよ。百人足らずの人足を、無錢で役つてさ。」

「腰辨當でやつて来るには感心したよ。」

「眞個にねえ。あのまあ蛇のるさうな草原を綺麗に撈らして、高見で見物なんざ太閤様も跣足で

すよ。」

「左様かの。いや、さうあらう。實は自分ながら感心した。」

と揚々として頭髻掻い撫つれば、美人は只管媚を獻じ、

「ねえ貴下、私は何んの因果で弱小な土地に生れたんでせう。もう／＼眞個に愛想が盡きたんですよ。」

へいげんは頷きて、

「さうありたい事だ。斯ういつちや卿の前だが、實に日本人は馬鹿さな。併し餘り不便だ。せめて一件の金時計を蔭ながら拜ましてやらうか。」

と衣兜を探りて、金光燦爛たる時計を出だし、恭しく隻手に捧げて遙に新開地に向ひ、陋み嘲けるごとき音調にて、

「そら此だ、此だ。」

途端に絶叫の聲あり、

「あれえ！」

只見れば美人は仰様に轉び、緑髪は砂に塗れて白き踵は天に朝せり。

太く喫驚せるへいげんは更に驚きぬ、手中の金時計は既に亡し。

中

「おい大助。」

卒然從者を顧みて立住まれる少年は、へいげん等を去ること數十歩ばかり後の方にありて、浪打際を散歩せるなり。父は小坪に柴門を閉ぢ、城市の喧塵を避けて、多日浩然の氣を養ふ何某とかやいへる子爵なり。其兒三郎年紀十七、才名同族を壓して、後來多望の麒麟兒なり。隨ふ壯佼は南海の健兒栗山大助。

「若様何でございます。」

「我が謂つた通り、金時計は虚言だ。」

其聲既に怒を帯びたり。

「何うしてお解りになりました。」

「今二人で饒舌つてたらう。」

「私には解りませんが、頻に饒舌つてをりましたな。」

「應、解るまいと思つて人の聞くのも憚からず、英語ですつかり白狀した。つまり百圓を餌にして皆を釣つたのだ。遺失たも無いものだ、時計は現在持つてゐる。汝も我の謂ふことを肯かんで

草刈をやらうものなら、矢張日本人の馬鹿になるのだ。」

血氣勃勃たる大助は、斯くと聞くより扼腕して突立つ時、擦違ふ者あり、横合より礮と少年に抵觸る。啊呀といふ間に遁げて一間ばかり隔りぬ。

「掏摸だ！」

三郎が聲と共に大助は身を躍らして、無手と曲者の頸髪執つて曳僵し、徹塵になれと頭上を亂打す。

「手暴くするな。」

と少年は大助を制して、更に極めて溫和なる調子にて、

「おい盗つたらう。」

掏摸は陳じ得ず、低頭して罪を謝し、拔取りたる懷中物を恐るゝ捧げて踞まりつ、

「何卒お見逃しを願ひます。」

少年は打笑ひつゝ、

「何、突出しやせん。汝はなか／＼熟練なものだ。」

「飛んだことをおつしやいます。」

「いや其手腕を見込んで、ちつと依頼があるのだ。」

大助は愕然として若様の面を瞻りぬ。

「この懷中物もやらう。もつと欲くばもつと遣らう。依囑といふのは、そら彼處へ行く、あの、
喃、」

とへいげんを指して、

「彼奴の持つてゐる時計を拘つてくれんか。」

其意を得ざる拘摸は、唯へいくと應ふるのみ。

大助は驚きて、

「え、若様滅相な。」

「いや少し了簡があるのだ。」

拘摸は事も無げに頷きて、

「ぢやあの金時計ですね。」

「汝知つてゐるのか。」

「そりやちゃんと睨んであります。あんな品は盗つても、賣るのに六ヶ敷いから見逃がして置くもの、盗らうと思やお茶の子でさあ。」

「いや太々しい野郎だなあ。」

と大助は呆然たり。

「汝も聞いたらう、あの長谷の草刈騒動を。」

「知つてゐる段ですか。」

三郎は告ぐるに實を以てすれば、

「へえあの毛唐が！」

と拘摸だに猶憤慨の色を表はせり。

「若様此奴は離すと、直に逃げてしまひますよ。」

「こう、情無いことを謂ひなさんな。私やこんなものでもね、日本が大の眞贋さ。何の赤髯、蓑でも喰へた。え、其金時計は直に強奪つて持つて來やす。」

斯りし後、へいげんは其の簪の花を汚され、剩へ掌中の珠を奪はれたるなり。

下

三郎は拘摸の奪ひたりし金時計を懐にしつ、健兒大助を従へて、其夕月下にへいげんの門を敲きぬ。

誰何せる門衛に、我は小坪の某なり、約束の時計を得たれば、敢て主公に呈らせむと來意を告

げ、應接室に入るに際して、執事は大助を見て三郎に向ひ、

「時計を御拾得の方は貴下ですな。此方は何用で入らつしやいました。」

三郎未だ答へざるに、大助は破鐘聲を揚げて、

「俺あ下男だ。若様の随伴をして來たのだ。」

「そんなら供待でお控へなさい。」

と叱する如く窘めたり。大助は團栗眼を睜きて、

「汝達の指圖は承けねえ。さあ若様御一所に入りませう。」

執事は之を遮りて、

「否なりません。應接室へは、用事のある客の外は、一切他人を入れませんのが、當家の家風で

ございます。」

へいげんは金時計を失ひて、忽ち散策の興覺め、悄悄家に歸りて、燈下に愛妾と額を鳩めつ、

其失策を悔い且つ悲しみ、怏々として樂まざりし。然るに突然珍客ありて、告ぐるに金時計を還

さむ事を以てせり。へいげんは快然愁眉を開きしが、省みれば衷に疚しきところ無きにあらず。

設彼にして懸賞金百圓を請求せむか。我に豫め約あれば駟も及ばず、今將之を奈何せむ。

身を一室に潛めて、先づ其來客を窺へば、料らざりき紅顔の可憐兒、二十歳に滿たざる美少な

らむとは。這奴、小冠者何程の事あらむ。さはあれ従者に勇士の相あり。手足皆鐵、腕力想ふべしと、へいげん漫に舌を捲き、乃ち執事をして大助を遠ざけしめむとしたるなり。

大助は敵の我を忌むを識りて、小主公の安否心許無く、猶推返して言はむとするを、三郎は遮りて、

「宜しい彼室で待つてな。」

「だつて若様。」

「可いよ。」

と眼もて語れば、大助は強ふるを得ず、

「え、何處で待つのだ。案内しろ。」

「靜にせんか、何といふ物言ひだ。」

と三郎は警めぬ。

執事は大助を彼方の一室へ案内し、礙と閉ざして立去りける跡に、大助は多時無事に苦みつ、挫々としこを踏みて四壁を動かし、獅子の如き力聲を發して、満腔の銳氣を洩しながら、猶徒然に堪へざりけり。

應接室にては三郎へいげんと卓子を隔てて相對し、談判今や正に闌なり。洋妾も傍に侍したり。

渠は得々としてへいげんの英語を通辯す。

此時三郎を輕んずる如く、

「一體貴下は何御用でお出でなすつたのです。拾つた物なら素直に返して、さつさとお歸りなすつたら可いぢやございませんか。」

「お黙んなさい。時計と交換にお禮の百圓を戴きに來ました。」

「品物を拾つて、其を返すのに禮金を與れと、其方からおつしやる法はございますまい。」

「否、普通拾つて徳義上御返し申すのなら、下さるたつて戴きません。然し今度のは——斯う謂つちや陋しい様ですが——禮金が欲しさに働きましたので、表面は兎も角、謂はば貴下に雇はれたも同でございます。それに承れば、何か貧乏人を賑はすといふ様な、難有い思召から出た事だと申しますが。」

と辯舌流るゝ如く、滔々として論じ來るに、へいげん等は這は案外とおもへる様にて、

「それぢや御持參の時計を拜見いたしませう。」

「これです。」と懷より時計を出だして指示せば、

「どれ／＼。」と取らむとするを然は爲せず、三郎は莞爾として、

「違へば他に遺失人を探します。貴下のなら百圓下さいまし。」